

[研究報告]

精神看護学における視聴覚教材を用いたシミュレーション演習 に対する看護学生の学習意欲と評価

早 木 幸 江^{1)*} 久 松 美佐子¹⁾
江 上 史 子¹⁾ 山 下 亜矢子²⁾

Nursing Students' Motivation to Learn and Evaluation of Simulation Exercises Using
Audiovisual Materials in Psychiatric Nursing

Yukie HAYAKI, Misako HISAMATSU, Fumiko EGAMI, Ayako YAMASHITA

和文抄録

本研究は、精神看護学における視聴覚教材を用いたシミュレーション演習に対する看護学生の学習意欲と評価について明らかにすることを目的とした。看護系大学において精神看護学Ⅱを履修した2年次看護学生113名を対象として、質問紙調査を実施した。調査内容は、看護学生の学習意欲を測るARCSモデルと演習に関する評価であった。分析方法は、ARCSモデルと看護学生の演習に関する評価との相関係数を求めた。また、自由記述に関しては、質的記述的分析を行った。回答を得た看護学生は110名であった（回収率は97.4%）。ARCSモデル合計点においてPearsonの積率相関分析を行った結果、ARCSモデルの4要素全ての項目において関連を認めた。また、「シミュレーション演習を通して対象に合った看護の実践を学べた」等の意見があった。視聴覚教材を用いたシミュレーション演習により、看護学生の学習意欲の向上や、精神疾患を有する対象への看護実践力の向上につながることが示唆された。

キーワード：精神看護学，シミュレーション演習，学習意欲，学習評価

I 緒言

厚生労働省による看護基礎教育検討会において、対象との信頼関係を構築するためのコミュニケーション能力の向上や必要な臨床判断を行うための基礎的能力を養うよう明記されている¹⁾。また、看護学生の看護実践についての分析力、統合力を身につけるために、シミュレーション等を活用した演習が推進¹⁾されており、看護基礎教育で信頼関係構築に向けたコミュニケーション方法や臨床判断能力・実践力の修得が求められている。

看護基礎教育における精神看護学の看護技術には、

援助関係構築のためのコミュニケーション技術の修得が求められ、精神看護実践能力の育成への取り組みとしても、実際の臨床場面や実践的な経験を再現した環境で、学習者が実践能力を培う教育であるシミュレーション教育が進められている²⁻⁶⁾。これまでの精神看護学のシミュレーション教育では、精神疾患を有する対象へのイメージが肯定的に変化したことやコミュニケーションの技術向上に効果があったという報告から、一定の効果が示されている²⁻⁶⁾。また、特定の状況を模擬した演習であるシミュレーション演習の中では、看護学生は相手を知ることから始まり、必要な情報を考え、次につながる会話を

所属

¹⁾ 熊本保健科学大学 保健科学部 看護学科

²⁾ 鹿児島大学 医学部 保健学科 看護学専攻

責任著者：早木幸江 hayaki@kumamoto-hsu.ac.jp

進め、「沈黙」という緊張のある経験をし、「難しい」という感想をもちつつも、それを様々な視点から捉えていく³⁾とされている。

この一方で、精神看護学教育におけるシミュレーション教育を行う上で支障となり得ることとして、看護学生が精神疾患に対してなじみがないこと、ネガティブなイメージをもっている⁴⁾ことが報告されている。また、シミュレーション教育を行う早い段階でより深く状況を理解できることが課題とされている⁵⁾。Meleisの移行理論によると、実習へ向けた講義の最終段階である時期は、看護学生が実習という環境に適応していく変化に向けた移行期間である⁷⁾が、看護学生がこの時期に精神疾患やケアを提供する対象の理解が十分でない状況であれば、実習に対する不安や学習意欲に影響することが考えられる。

以上のことから、精神看護学実習の前に、看護学生の精神疾患を有する対象への理解の促進と精神疾患を有する対象とのコミュニケーション技術の修得、さらには実習での看護実践をイメージ化し学習意欲を促進することが必要であると考え。そのためには、現実的な場면을提示し対象理解と看護実践のイメージ化の促進を図るとされる視聴覚教材を活用⁸⁾し、よりリアリティのある状況下でシミュレーション演習を実施することが必要であると考え。しかし、これまで、視聴覚教材を用いて精神疾患を有する対象の理解やイメージ化を行った上で、シミュレーション演習を実施し、その効果を明らかにした論文は見当たらなかった。

そこで本研究は、精神看護学における視聴覚教材を用いたシミュレーション演習に対する看護学生の学習意欲と評価について明らかにすることを目的とする。

Ⅱ 方法

1. 研究デザイン

本研究は、質的研究と量的研究を合わせた混合研究法を用いた。

2. 用語の定義

シミュレーション教育では、患者の状態や置かれている状況を教材とした「シミュレーション」で患者とかかわり、その後は、シミュレーションでの看

護師のかかわりについて、専門的な知識に基づいて仲間とともにディスカッションしながら学んでいく「デブリーフィング」という流れで学習するシチュエーション・ベースド・トレーニングが用いられている⁹⁾。

本研究におけるシミュレーション演習とは、シチュエーション・ベースド・トレーニングを用いて、よりリアリティのある状況下で精神疾患を有する対象とのコミュニケーションおよび看護実践の場面を設定してロールプレイとデブリーフィングを繰り返して実施する演習のことと定義する。

3. 調査対象者

調査対象者は、看護系大学において精神看護学Ⅱを履修し、視聴覚教材を用いたシミュレーション演習（以下：全演習）を受講した2年次看護学生113名とした。

4. 全演習のプロセス

精神看護学Ⅱは、2年生の後期に開講する2単位45時間、全23回の科目である。精神障害を有する対象の治療や回復過程を理解し、対象を全人的な存在として捉え個別性を尊重した援助の在り方について、講義と演習を通して学ぶ科目である。

全演習は、入院1か月後の統合失調症患者の事例を読み視聴覚教材を視聴してから、看護過程を展開し、立案した看護計画についてシミュレーション演習を行うものである。下記1)を1コマの講義・机上演習および個人ワークは課題として後日提出、2)～3)を2コマの机上演習、4)～5)を1コマの実技演習、6)を1コマの机上演習として実施した。

- 1) 事例について、紙面上の情報と教員が作成した視聴覚教材を学生が視聴し、個人ワークで看護過程を展開した。視聴覚教材の内容は、看護師が検温のために統合失調症をもつ患者の部屋に訪室し、体調などを観察する場面である。
- 2) 4人1組のグループワークでアセスメントと看護診断、看護計画を共有し、グループで1つの看護計画を立案した。
- 3) グループで立案した看護計画について場面設定を行い、6分程度の看護の実践場面を組み立てた。
- 4) 看護学生役（1名）・患者役（1名）・観察者役（2名）を演じながらグループでロールプレイを

行った。1回のロールプレイ（6分）の後にデブリーフィング（8分）を行い、グループ全員が3つの役を体験した。

5) デブリーフィングでは、「Aさんの援助をどのように工夫し実施したか」、「行った援助へのAさんの反応はどうだったか」、「Aさんの反応を踏まえ、援助を評価し、今後必要な援助はどのようなことか」、「そのほか、患者役、観察者役が気づいた点」についてグループごとに振り返りを行った。

6) 全演習の振り返りとして、対象理解や看護過程の展開・実践について、全演習を通しての学びをグループで振り返り、全体で共有した。

教員は、全30グループ編成後に5グループを担当し、ファシリテーターを行った。ファシリテーターは、各教員が統一したファシリテーションができるよう事前に打ち合わせを行い、「教える」「教え込む」のではなく⁶⁾、学生が必要な視点を気づくことができるように「考えるきっかけを投げかける」ことや、「肯定的なフィードバック」を行うことにより、看護学生が主体的に学習できるよう支援した。

5. 調査方法

本研究の調査期間は、全演習が終了した2023年12月とした。

調査対象者である看護学生に、調査の意義と目的、調査票への記入方法、回収方法、倫理的配慮（自由意思での参加であること、個人情報保護など）について記載した説明文書と質問紙調査票を配布した。回収方法は、アンケートの回答欄の同意欄にチェックを入れることをもって研究の同意を得たものとし、回答が得られた質問紙調査票は厳封後、学科内に設置した回収箱に後日投かんすることとした。

6. 調査内容

1) 学習意欲に関する評価

本研究では学習意欲の評価にARCSモデルを用いた。ARCSモデルとは、1983年に教育心理学者のKellerが「Attention（注意喚起）」「Relevance（関連性）」「Confidence（自信）」「Satisfaction（満足感）」の4要素の頭文字を用いて提唱した学習意欲向上モデルである^{10,11)}。本モデルは、教育における研究に幅広く用いられており^{11,12)}、看護分野におい

ても研究に使用されている^{13,14)}。

調査では4要素16項目について、「そう思う（5）」「どちらかといえばそう思う（4）」「どちらでもない（3）」「どちらかといえばそう思わない（2）」「そう思わない（1）」の5件法にて回答を求め、点数は高い方が、学習意欲が高いと評価し、最高点は80点である。なお、「目標があいまいだった」という問いに関しては逆転項目となっている。

2) シミュレーション演習に関する評価

看護学生のシミュレーション演習に関する評価として、大橋ら¹⁵⁾の論文を参考にして著者らが作成した5つの項目（①事例について理解が深まった、②事例展開に活用できる内容であった、③演習に主体的に取り組むことができた、④精神障害をもつ人とのコミュニケーションについて学ぶことができた、⑤精神看護学実習に活用できる内容であった）について、「そう思う（5）」「どちらかといえばそう思う（4）」「どちらでもない（3）」「どちらかといえばそう思わない（2）」「そう思わない（1）」の5件法にて回答を求めた。点数は高い方がシミュレーション演習に関する評価が高いと評価する。

3) シミュレーション演習に関する評価についての自由記述

シミュレーション演習に関する看護学生の評価について自由記述にて回答を求めた。

7. 分析方法

各調査項目について単純集計を行った。その後、Shapiro-Wilk検定による正規性を確認した。また、ARCSモデルのCronbach's α 係数を算出し、信頼性の確認を行った。その後、ARCSモデル合計点と看護学生のシミュレーション演習に関する評価合計点のPearsonの積率相関係数を求めた。統計解析ソフトはJMP Pro17.0を使用し、有意水準は5%未満とした。

自由記述に関しては、意味の共通性・類似性・弁別性に従って比較・分類しサブカテゴリを生成した。さらに類似したサブカテゴリを集約し、カテゴリを生成した。なお、厳密性担保のため、共同研究者と定期的にディスカッションを実施し、納得できる分析結果となるまで検討して決定した。

8. 倫理的配慮

調査対象者には、研究への参加は個人の自由意思

であること、研究に不参加であっても不利益を被らないこと、個人情報特定されないよう処理した上で研究に利用すること、情報漏洩がないよう情報管理に努める旨を文書で伝えた。

なお本研究は、熊本保健科学大学ライフサイエンス倫理審査委員会（承認番号：23033）の承認を受けて実施した。

Ⅲ 結果

1. 看護学生のシミュレーション演習に対する学習意欲と評価

2年次看護学生113名のうち、110名より回答を得た。回収率は97.4%（有効回答率100%）であった。

ARCS モデル合計点は Shapiro-Wilk 検定の結果、 $p = 0.0331$ であり正規分布を示していた。また、ARCS モデルの Cronbach's α 係数は、0.84であった。ARCS モデル合計点の平均は 67.1 ± 7.09 であり、領域別の平均点は、「Attention（注意喚起）」 4.15 ± 0.52 、「Relevance（関連性）」 4.34 ± 0.50 、「Confidence（自信）」 3.94 ± 0.57 、「Satisfaction（満足感）」 4.32 ± 0.52 であった（表1）。

看護学生のシミュレーション演習に関する評価の各項目の平均点は、「事例について理解が深まった」 4.66 ± 0.47 、「事例展開に活用できる内容であった」 4.65 ± 0.49 、「演習に主体的に取り組むことができた」 4.53 ± 0.61 、「精神障害をもつ人とのコミュニケーションについて学ぶことができた」 4.68 ± 0.48 、「精神看護学実習に活用できる内容であった」 4.77 ± 0.42 であった（表1）。

2. 看護学生のシミュレーション演習に対する学習意欲と評価の関連

ARCS モデル合計点と看護学生のシミュレーション演習に関する評価合計点について、Pearson の積率相関分析を行った結果、ARCS モデルの「Attention（注意喚起）」（ $r = 0.572$, $p < 0.0001$ ）「Relevance（関連性）」（ $r = 0.557$, $p < 0.0001$ ）「Confidence（自信）」（ $r = 0.475$, $p < 0.0001$ ）「Satisfaction（満足感）」（ $r = 0.598$, $p < 0.0001$ ）の4要素全ての項目において有意な正の相関を認めた（表2）。

3. 看護学生のシミュレーション演習に関する評価

内容

看護学生のシミュレーション演習への評価に関する自由記述について、質的記述的分析によるカテゴリ化を行った結果、【最初に視聴覚教材を視聴することで対象をイメージして看護過程を展開しシミュレーション演習につなげることができた】【シミュレーション演習を通して精神障害を有する対象像をイメージしたコミュニケーション技法の修得に役立った】【シミュレーション演習で実践とデブリーフィングを重ねることにより対象に合った看護の実践を学べた】【シミュレーション演習を通して医学的知識と計画の重要性を再認識できた】【患者役・観察者役の視点から看護師に必要な姿勢に気づく機会となった】【精神科の実習に活用できる】【一事例について一連の過程を行うことで患者理解から実践までの方法の理解が深まった】の7つのカテゴリが抽出された（表3）。

以下、カテゴリを【 】、サブカテゴリを《 》、記述内容を< >で記載する。

1) 【最初に視聴覚教材を視聴することで対象をイメージして看護過程を展開しシミュレーション演習につなげることができた】

このカテゴリは、《視聴覚教材の視聴により対象をイメージすることで看護過程の展開に役立った》《視聴覚教材の視聴が対象とのコミュニケーションの行い方の参考になった》《視聴覚教材の視聴が場面を想定したシミュレーション演習へつなげることに役立った》の3つのサブカテゴリから生成された。記述は、<患者の映像を事前に見たことで状態を考えやすく、アセスメントしやすくなった>や、<映像を見ることで、イメージが湧きやすく場面を想定してシミュレーションにつなげることができた>などの内容があった。

2) 【シミュレーション演習を通して精神障害を有する対象像をイメージしたコミュニケーション技法の修得に役立った】

このカテゴリは、《精神障害を有する対象をイメージしながらコミュニケーションを図ることに役立った》《視聴覚教材の視聴・事例展開後の実践により対象の状態や状況にあった関わり方を学ぶ機会となった》《対象との関係を築くための基本的なコミュニケーションの重要性が再理解できた》《ケアにつなげる意図的なコミュニケーションの実践につながった》の4つのサブカテゴリから生成された。

表1 看護学生のシミュレーション演習に対する学習意欲と評価

n = 110

ARCS モデル	平均点 ± SD (合計点の平均 ± SD)	Cronbach's α 係数
ARCS モデル	4.19 ± 0.44 (67.1 ± 7.09)	0.84
Attention (注意喚起)	4.15 ± 0.52 (16.6 ± 2.08)	—
Relevance (関連性)	4.34 ± 0.50 (17.3 ± 2.02)	
Confidence (自信)	3.94 ± 0.57 (15.7 ± 2.29)	
Satisfaction (満足感)	4.32 ± 0.52 (17.3 ± 2.08)	
シミュレーション演習に関する評価	4.66 ± 0.41 (23.3 ± 2.04)	—
事例について理解が深まった	4.66 ± 0.47	—
事例展開に活用できる内容であった	4.65 ± 0.49	
演習に主体的に取り組むことができた	4.53 ± 0.61	
精神障害をもつ人とのコミュニケーションについて学ぶことができた	4.68 ± 0.48	
精神看護学実習に活用できる内容であった	4.77 ± 0.42	

信頼性係数の算出には、Cronbach's α 係数を用いた。

表2 看護学生のシミュレーション演習に対する学習意欲と評価の関連

n = 110

ARCS モデル	相関係数	p 値
Attention (注意喚起)	0.572	<0.0001
Relevance (関連性)	0.557	<0.0001
Confidence (自信)	0.475	<0.0001
Satisfaction (満足感)	0.598	<0.0001

相関係数には、Pearson の積率相関係数を用いた。

記述として、＜精神疾患をもつ人とのコミュニケーションで傾聴や共感の仕方や、その日の状態に合わせたケアを行うことの大切さを学べた＞や、＜精神障害をもつ人とどのようにコミュニケーションを行っていけばよいかを学ぶことができた。対応の仕方も学ぶことができた＞などの内容があった。

3) 【シミュレーション演習で実践とデブリーフィングを重ねることにより対象に合った看護の実践を学べた】

このカテゴリは、《実践とデブリーフィングの繰り返しにより良いケアの検討に役立った》《自己の実践を振り返り自己の課題を知る機会となった》《実践に自信がもてる機会となった》《グループでの意見交換による学びの深まりにつながった》の4つのサブカテゴリから生成された。記述には、＜頭

で想像するのとは違い、実際に看護師役、患者役、観察者役様々な視点で行うことで、自分が行った援助が患者にとってどういう気持ちだったのか聞くことができました。そこから、患者さんの体調、表情、気分に合わせて関わりだったり、相づちなどの話を聞く姿勢が大切だと学びました＞や、＜演習を行って自分に足りていないところに気づくことができました。また、グループで行ったため、グループの人の良かったところを見つけることができました。これらを踏まえて実習に臨んでいきたいです＞などの内容があった。

4) 【シミュレーション演習を通して医学的知識と計画の重要性を再認識できた】

このカテゴリは、《実践を通して具体的な看護計画立案の必要性を認識した》《知識の必要性を再確

表3 看護学生のシミュレーション演習に関する評価

カテゴリ	サブカテゴリ
最初に視聴覚教材を視聴することで対象をイメージして看護過程を展開しシミュレーション演習につなげることができた	視聴覚教材の視聴により対象をイメージすることで看護過程の展開に役立った
	視聴覚教材の視聴が対象とのコミュニケーションの行い方の参考になった
	視聴覚教材の視聴が場面を想定したシミュレーション演習へつなげることに役立った
シミュレーション演習を通して精神障害を有する対象像をイメージしたコミュニケーション技法の修得に役立った	精神障害を有する対象をイメージしながらコミュニケーションを図ることに役立った
	視聴覚教材の視聴・事例展開後の実践により対象の状態や状況にあった関わり方を学ぶ機会となった
	対象との関係を築くための基本的なコミュニケーションの重要性が再理解できた ケアにつなげる意図的なコミュニケーションの実践につながった
シミュレーション演習で実践とデブリーフィングを重ねることにより対象に合った看護の実践を学べた	実践とデブリーフィングの繰り返しにより良いケアの検討に役立った
	自己の実践を振り返り自己の課題を知る機会となった
	実践に自信がもてる機会となった グループでの意見交換による学びの深まりにつながった
シミュレーション演習を通して医学的知識と計画の重要性を再認識できた	実践を通して具体的な看護計画立案の必要性を認識した
	知識の必要性を再確認できた
患者役・観察者役の視点から看護師に必要な姿勢に気づく機会となった	患者役・観察者役の体験から看護師として必要な要素に気づいた
	患者の反応からケアを検討する必要性の気づきがあった
精神科の実習に活用できる	実習先で看護学生としてできることのイメージができた
	実習をイメージでき自己の取り組むべき課題に気づけた
	精神科の実習のイメージがつき実習への準備となった
一事例について一連の過程を行うことで患者理解から実践までの方法の理解が深まった	一事例について一連の過程を行うことで患者理解から実践までの方法の理解が深まった

認できた」の2つのサブカテゴリから生成された。記述としては、＜患者の状態に合わせて看護計画を立案することの大切さ＞や、＜必ずしも計画した通りに進む訳ではないので、いろいろなパターンを考えておく必要があるということが分かった＞などの内容があった。

5) 【患者役・観察者役の視点から看護師に必要な姿勢に気づく機会となった】

このカテゴリは、＜患者役・観察者役の体験から看護師として必要な要素に気づいた＞＜患者の反応からケアを検討する必要性の気づきがあった＞の2つのサブカテゴリから生成された。記述には、＜患者役を行い、想像しているよりも、看護師の表情、視線は目に入り、気になるものなのだと感じた＞＜患者の言動からどんなケア、声かけが必要なのか

考えることができた＞などの内容があった。

6) 【精神科の実習に活用できる】

このカテゴリは、＜実習先で看護学生としてできることのイメージができた＞＜実習をイメージでき自己の取り組むべき課題に気づけた＞＜精神科の実習のイメージがつき実習への準備となった＞という3つのサブカテゴリから生成された。記述には、＜看護学生でも実習先で患者さんと関わることが回復やその後の経過につながることを学べた＞＜実習や将来の現場について具体的な想像ができた。それによって自分が行うべき行動について選択肢が増え、今自分に足りない部分にも気づくことができた＞などの内容があった。

7) 【一事例について一連の過程を行うことで患者理解から実践までの方法の理解が深まった】

このカテゴリは、《一事例について一連の過程を行うことで患者理解から実践までの方法の理解が深まった》という1つのサブカテゴリから生成された。記述として＜精神疾患をもつ人との関わりに関して、机上ではイメージが湧かなかったが、事例を基に演習を行って見て、どういう風に援助を行えばよいのか想像することができた＞や、＜情報収集から計画立案までの流れを自分以外の人を見ることで様々な考えが理解できた＞などの内容があった。

Ⅳ 考察

1. 看護学生のシミュレーション演習に対する学習意欲と評価の関連について

ARCS モデル合計点と看護学生のシミュレーション演習に関する評価合計点の Pearson の積率相関分析を行った結果、ARCS モデルの4要素全ての項目において関連を認めていた。ARCS モデルは、学習意欲に影響を及ぼすとされる4要素で構成されている¹⁰⁾。また、看護学生のシミュレーション演習に関する評価には、事例についての理解や事例展開に活用できる内容、演習に主体的に取り組むことに関する項目があることから、視聴覚教材を用いたシミュレーション演習は、学習に関する動機づけさらには学習意欲の向上に効果があったものと考えられる。

木村ら¹²⁾の論文では、ARCS モデルの各領域の平均点が $3.25 \pm 0.85 \sim 4.10 \pm 0.76$ という結果が示され、自信や満足感の平均点が低かったことに関して、全員が患者や看護者役を行っていない影響が述べられている。本研究では、看護学生全員が患者役、看護学生役、観察者役を体験し、それぞれの立場から意見を述べ合いグループメンバーでより良い看護を導き出していったことが、注意喚起、関連性、自信、満足感の全てに関連していた要因であると考えられる。

しかしながら、本研究においては「Attention（注意喚起）」 4.15 ± 0.52 、「Relevance（関連性）」 4.34 ± 0.50 、「Satisfaction（満足感）」 4.32 ± 0.52 に対して、「Confidence（自信）」は 3.94 ± 0.57 と最も低値であった。ARCS モデルは、学習意欲のプロフィールの診断や、明らかになった特定の問題に対する適切な動機づけ方策を立案する際に役立つといわれている¹⁰⁾。「Confidence（自信）」は、学習者の不安を減らし、現実的な成功に期待をもたせるために、何が期待さ

れるのか理解できるように説明すること、肯定的なフィードバックや矯正的なフィードバックをすることにより、自分で成功できたといった自信が構築される¹⁰⁾。今回の「Confidence（自信）」の結果には、シミュレーション演習の準備での期待に焦点を当てた教員の説明方法、看護学生役を行う回数、成功体験として認識できるフィードバックの活用の仕方が影響した要因として考えられた。

2. 看護学生のシミュレーション演習に関する評価について

シミュレーション演習に関する評価についての自由記述に関して、質的記述的分析を行った結果、7つのカテゴリが抽出された。

【最初に視聴覚教材を視聴することで対象をイメージして看護過程を展開しシミュレーション演習につなげることができた】は、シミュレーション演習前に視聴覚教材の視聴を行うことにより、精神疾患を有する対象へのイメージ化が図れたこと、またその後のシミュレーション演習にいかせることを示している。精神看護学におけるシミュレーション教育を行う上で支障となり得ることとして、看護学生が精神疾患に対してなじみがないこと、ネガティブなイメージをもっていることである⁴⁾という報告がある。シミュレーション演習前に視聴覚教材を視聴し、対象の状況をより正確に捉えて、リアルに対象をイメージすることは、看護過程の展開やシミュレーション演習への学習意欲につながると考える。

【シミュレーション演習を通して精神障害を有する対象像をイメージしたコミュニケーション技法の修得に役立った】は、視聴覚教材を視聴し事例展開後に実践することで、対象の状態や状況にあった関わり方やケアにつなげる意図的なコミュニケーションを学ぶ機会となっていたことである。精神看護学のシミュレーション教育において、距離の取り方や観察をすること、共感や沈黙の重要性について学んだ⁵⁾という報告がある。今回の全演習では、ある場面設定したシミュレーション演習に比べ、視聴覚教材の視聴と看護過程の展開を通して、より対象を理解しイメージしながらコミュニケーションを図れるという効果が加わったものといえる。また、対応の仕方を学んだ看護学生も多く、視聴覚教材で看護師の対象への関わりをモデリングとして捉えることで、自己のコミュニケーションの取り方も検討しやすく

なったと考える。さらに、机上で学んだコミュニケーション技術について視聴覚教材にてイメージ化を図れたことが、より意図的なコミュニケーションの実践につながり、やりがいや学習意欲に影響する可能性が考えられた。

【シミュレーション演習で実践とデブリーフィングを重ねることにより対象に合った看護の実践を学べた】は、《実践とデブリーフィングの繰り返しにより良いケアの検討に役立った》《自己の実践を振り返り自己の課題を知る機会となった》とあり、実施して終わりではなく、振り返りにより、自己の傾向を知るとともに、より対象に合ったケアの提供へ向けた検討の重要性について考えていた。また、《実践に自信がもてる機会となった》《グループでの意見交換による学びの深まりにつながった》とあり、実施・振り返りの繰り返しの中でのグループダイナミクスにおける効果から、次の実施への学習意欲に影響している可能性が考えられた。

【シミュレーション演習を通して医学的知識と計画の重要性を再認識できた】は、急性期看護学のシミュレーション演習における研究結果にある力不足を自覚し学習刺激を受けるというカテゴリに通じるといえる¹⁶⁾。これは、実習に関する危機感が、否定的な感情よりも学習に対する価値と目的を実感し、学習意欲を生じさせた¹⁶⁾とされている。本研究でも、《実践を通して具体的な看護計画立案の必要性を認識した》《知識の必要性の再確認》と同様の結果であり、実践を通して危機感から学習の必要性を認識することで、より積極的な学習意欲へとつながると考える。

【患者役・観察者役の視点から看護師に必要な姿勢に気づく機会となった】は、患者役や観察者役の視点から、どのような看護師に話を聞いてほしいと思うか等、別の視点から振り返ることにより、視野が広がっていることを示している。これは、Davisの共感プロセスにおける「視点取得」に相当する経験^{3,17)}ともいえ、他者の視点を積極的に考え、他者がどのように考えているかを推測することで、看護師としてどう行動するかを考える喚起となっていたといえる。

【精神科の実習に活用できる】は、《実習先で看護学生としてできることのイメージができた》《実習をイメージでき自己の取り組むべき課題に気づけた》と、全演習を通して精神科の実習に対するイ

メージ化の促進にもつながったことを示している。臨地実習における看護学生の困難感には、看護援助の実施が最も困難感が高い¹⁸⁾とされていることから、実習前に実習先での看護をイメージし準備できることの意義は大きく、シミュレーション演習で看護援助の実施を体験したことが、実習に対する学習意欲にも影響を与えている可能性が考えられた。

【一事例について一連の過程を行うことで患者理解から実践までの方法の理解が深まった】では、シミュレーション演習が看護展開への自信や満足感につながったことを示している。Kellerは、自信を向上する教育について学習者が成功できること、また、成功は自分たちの工夫次第だと確信・実感するための助けになることであると述べている^{10,11)}。このように、全演習の一連の過程を通して、グループでの検討に加えて、自己の看護実践に対するグループメンバーからの肯定的フィードバックをもらうことで、成功体験へとつながったといえる。さらに、シミュレーション演習により、机上での知識と看護実践の統合ができたと実感することで満足感につながったと考える。

3. 精神看護学におけるシミュレーション演習への示唆

本研究では、視聴覚教材を用いて精神疾患を有する対象へのイメージ化を図ること、さらにグループダイナミクスの活用によって、机上での知識と看護実践の統合ができたという満足感から、学習意欲へとつながることが考えられた。一方で、看護学生はこれでいいのかといった不安感を抱きながらシミュレーション演習を進めており、看護学生が看護に対する自信を得られるようにシミュレーション演習を工夫することが求められる。

以上のことから、今後精神看護学におけるシミュレーション演習の発展に向けて、シミュレーション演習の回数を増やし成功体験の機会を増やすとともに、グループメンバーや教員からの肯定的なフィードバックや助言をもらう時間を確保する必要がある。これにより、看護学生の看護に対する自信や満足感を高めながら、目標達成に向けての努力量に影響するとされる学習意欲¹⁰⁾の向上に働きかけることができる。さらに、学習意欲は学習者がもつ知識やスキルと組み合わせさってパフォーマンスに影響を与える¹⁰⁾とされていることから、視聴覚教材を用

いたシミュレーション演習を活用することにより、精神疾患を有する対象の理解の促進や、コミュニケーション技術の向上、精神看護実践能力のさらなる育成に貢献できることが示唆された。

4. 研究の限界

今回の研究は研究対象校が1校であり、結果を一般化するには限界がある。さらに本研究は横断的研究であるため、研究結果を踏まえた教育や支援による看護学生の変化について、経時的な結果は得られていない。

今後は、視聴覚教材によるシミュレーション演習の学習効果についてさらなる効果検証ができるように、対象の拡大や縦断研究を行うなど研究方法を検討していく必要がある。

V 結論

本研究では、精神看護学における視聴覚教材を用いたシミュレーション演習に対する看護学生の学習意欲と評価において、ARCSモデルの全ての要素で看護学生のシミュレーション演習に関する評価との関連を認めた。また、看護学生のシミュレーション演習に関する評価についての自由記述からも精神疾患を有する対象に関する理解や援助関係構築に向けた意図的コミュニケーション、看護実践に対する満足感や実習への活用に関するカテゴリが抽出された。

今後さらにシミュレーション演習を工夫することで、看護学生の看護に対する自信や満足感を高め、学習意欲や看護実践力の向上を図る必要性が示唆された。

謝辞

1) 本学学内研究助成費

本研究は、熊本保健科学大学令和4年度大学教育改革推進プログラム(2022-教育-03)の助成を受け実施したものである。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

文献

- 1) 厚生労働省. 看護基礎教育検討会. 2019, <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (2024年8月13日検索).
- 2) 山下真裕子, 藪田歩, 伊関敏男. シミュレーション教育における精神障がい者のイメージへの影響ー本学の精神看護学教育における新たな取り組みー. 神奈川県立保健福祉大学誌, 13(1): 71-81, 2016.
- 3) 河村奈美子, 町田佳世子, 岩本祐一. 精神看護学におけるシミュレーション演習による看護学生の学びの広がり. 滋賀医科大学雑誌, 32(2): 1-7, 2019.
- 4) 佐藤史教. 認知行動療法を活用した精神看護学シミュレーション教育の効果. 岩手看護学会誌, 16(1): 13-24, 2022.
- 5) 平澤由希子, 迎田美香. 精神看護学におけるシミュレーション教育と臨地実習での学び コミュニケーションにおける学生の学びの検討. 日本看護学会誌, 18(2): 217-224, 2023.
- 6) 守村洋, 伊東健太郎. 当事者参加による精神看護学シミュレーション教育のプログラムの試みと学生の学び. 日本精神保健看護学会誌, 30(2): 9-18, 2021.
- 7) Meleis, A. I. Transition theory and nursing: for practice, research and education. 移行理論と看護 実践, 研究, 教育. 片田範子監訳. 学研, 37-58, 2019.
- 8) 辻義人. 視聴覚メディア教材を用いた教育活動の展望ー教材の運営・管理と著作権ー. 小樽商科大学人文研究, 115: 175-194, 2008.
- 9) 阿部幸恵監修. 看護教育におけるシミュレーション教育の導入 基本的な考え方と事例. 藤野ユリ子編集, 日本看護協会出版会, 21, 2018.
- 10) Keller, J. M. Motivational design for learning and performance: the ARCS model approach. 学習意欲をデザインする: ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン. 鈴木克明監訳. 北大路書房, 46-78, 2010.
- 11) 森田夏代, 田原恭子. 成人看護学シミュレーション演習の動画撮影と視聴導入による教育効果. 日本シミュレーション医療教育学会雑誌, 9: 11-17, 2021.

- 12) 木村奈緒美, 益田美津美, 中垣明美. 看護基礎教育における患者急変対応シミュレーション教材の開発とその効果. 日本看護科学学会誌, 41 : 79-87, 2021.
- 13) 浅野浩子, 中込さと子, 柊中智恵子, 他. ARCSモデルを用いた周産期遺伝看護教育プログラムの評価. 日本遺伝看護学会誌, 19 (2) : 54-65, 2021.
- 14) 鈴木美津枝, 村上礼子, 八木(佐伯)街子, 他. ICTを活用した「演習」から「シミュレーション実習」へ繋ぐ企画の評価. 日本シミュレーション医療教育学会雑誌, 5 : 30-34, 2017.
- 15) 大橋麗子, 宮野幸子, 山本駿, 他. 看護過程の展開と連動した模擬患者を用いたシミュレーション演習「小児のバイタルサイン測定」における看護学生の学び. 日本看護学教育学会誌, 32 (2) : 175-185, 2022.
- 16) 松井美由紀, 宮宇地秀代. 急性期看護学においてシミュレータと模擬患者を用いたシナリオ型シミュレーション演習の成果. 愛媛県立医療技術大学紀要, 14 (1) : 13-18, 2017.
- 17) Davis, M. H. A Multidimensional Approach to Individual Differences in Empathy, Journal of Personality and Social Psychology, 10 : 1-19, 1980.
- 18) 中本明世, 伊藤朗子, 山本純子, 他. 臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較－基礎実習と成人看護学実習の比較を通して－. 千里金蘭大学紀要, 12 : 123-124, 2015.

(令和7年1月16日受理)

Nursing Students' Motivation to Learn and Evaluation of Simulation Exercises Using Audiovisual Materials in Psychiatric Nursing

Yukie HAYAKI, Misako HISAMATSU

Fumiko EGAMI, Ayako YAMASHITA

Abstract

This study aimed to clarify nursing students' motivation to learn and their evaluation of simulation exercises using audiovisual materials in psychiatric nursing. A questionnaire survey was conducted with 113 second-year nursing students who had completed the Psychiatric Nursing II at a nursing college. The content of the survey consisted of the ARCS model to measure nursing students' motivation to learn, their evaluation of the exercises, and their open-ended statements regarding their evaluation of the simulation exercises. Analytical method involved determining the correlation coefficient between the ARCS model and nursing students' evaluation of the exercises. Furthermore, a qualitative descriptive analysis was performed on the free-form responses. Responses were received from 110 nursing students (97.4% response rate). Pearson's product-moment correlation analysis of the total scores of the ARCS model revealed correlations between all four components of the ARCS model. There were also some comments such as "I was able to learn nursing practices suited to the subjects through the simulation exercises." Results suggest that simulation exercises using audiovisual materials can motivate nursing student to learn and improve their ability to practice nursing care for subjects with mental illness.

Keywords: psychiatric nursing, simulation exercises, motivation to learn, learning evaluation